季刊　ベストドクターズ®インジャパン　Issue 26　2014

Best Doctors®

今月のベストドクター

東京女子医科大学医学部腎臓小児科・教授
東京女子医科大学病院腎臓小児科・診療部長

服部 元史 先生

腎臓病の子どもたちが笑顔で家に帰れるように

「ドナーさんへ　管につながれずに生きていけます」「自分の足で立てるようになりました」。カンファレンスルームのボードに貼られていた、子どもたちから寄せられた数々のメッセージ。腎臓病の子どもたちが笑顔で家に帰って行けるように、薬物療法や透析、腎移植など、適切な治療法を組み合わせ、最良の診療を目指す服部元史先生。診療、研究、教育を担う大学病院において、自らが果たすべき役割や後進への期待を伺った。

東京女子医科大学医学部腎臓小児科・教授
東京女子医科大学病院腎臓小児科・診療部長
服部 元史 はっとり・もとし

1984年大阪医科大学卒業。同年、東京女子医科大学腎臓病総合医療センター腎臓小児科入局。92～94年、オーストラリア・モナシュメディカルセンター腎臓内科留学。97～99年、千葉県こども病院腎臓科（医長）派遣。2004年東京女子医科大学腎臓病総合医療センター腎臓小児科診療部長、05年より現職。日本の大学病院で唯一腎臓小児科を標榜し、子どもの腎臓病全般の病態解明、治療法の確立に尽力。

小児科の医師として子どもたちの今だけでなく将来を担う

腎臓小児科の外来を訪れたR君の両肩に手を添えながら「R君、無事？」。その一言から、服部先生の診察が始まる。取材スタッフの視線にはにかみながらも、R君が服部先生の問いかけにうなずく。

「元々は母の口癖だった」という“無事”の言葉は、今では、服部先生の口癖、それだけでなく腎臓小児科のメンバー全員の合言葉になっている。学会などで病院を留守にしたとき、カンファレンスで病棟の子どもたちの報告をするとき、外来で患者さんと顔を合わせるとき、いつも始まりは「無事？」の一言だ。「安否、状況……、いろいろな意味で無事と言えれば大丈夫」と服部先生は穏やかな表情を見せた。

R君は、10歳。6歳のとき、服部先生が月1回診療を担当している埼玉県立小児医療センター腎臓科で相談を受けて以来の付き合いだ。慎重な検査を重ね、常染色体劣性多発性嚢胞腎（ARPKD）と診断。2013年の5月に国立成育医療研究センターで肝移植を受け、今年の4月に服部先生の元で腎移植を受けた。「腎移植が済んでからは、元気がよく調子がよさそうです」

というお母さんの笑顔に「そうか、そうか」と服部先生も笑顔で応える。その間も、服部先生の両手は、R君の手をとったり、背中やお腹、太ももをさすったりとタッチング（スキンシップ）に余念がない。さらに「この前の診察は何日だったっけ？」「手術からどれくらい経った？」「お薬はどうだ？」と確認を重ねる。お母さんの助け船を借りながら、R君がいろいろな表情を浮かべ、それぞれの質問に答えていく。そうして、薬の変更・増減、次回の予約などが決まった。「じゃあ、R君よろしくな」。「バイバイ」と手を振りながら、R君親子が帰っていく。

「年齢によって話が分かる・分からないと区切ろうとしがちですが、子どもたちは、いくつであってもそれなりに理解力があります。何事も親とだけ話して決めるのは禁物。病気と付き合っていくのは本人です。ほとんどの子が病気と長い付き合いになるので、きちんと納得したうえで、自分で決めていく練習を重ねていかないと……」。小児科は、その子の今、そして将来をともに担う診療科だ。

長期入院を強いられる子どもたちも少なくない。長期欠席となり、勉強が中断してしまう学童期の子どもたちに何とか学習の場をと心を痛めていた。各方面への働きかけが実を結び、2013年春より、近隣の余丁町（よちょうまち）小学校の特別支援学級として、院内に「わかまつ学級」が開設された。病気を治すことだけでなく、よりよく生きるためのサポートも医師の大きな仕事である。

腎臓病では使用頻度の高いステロイドの副作用による臓器症状にはもちろん注意が必要だが、顔のむくみや低身長なども、思春期の子どもたちにとって繊細な問題であり、より深刻になりかねない。また、小児のうちに治りきらない、再発を繰り返すなど、成人以降も病気を持ち越す場合の移行（トランジション）は最近の課題となっている。「大人の腎臓の専門医にスムーズにバトンタッチしたり、心理士や栄養士など医師以外のスペシャリストとかかわったり、チーム医療や連携が欠かせません」

“5つのP”で最善最良の診療を

現在、服部先生が率いる東京女子医科大学腎臓小児科は、1979年4月に、東京女子医科大学病院腎臓病総合医療センターが設立されたときに、独立した診療科として出発している。日本の大学病院では唯一、小児腎臓病を専門に標榜する専門医集団である。

（上）移植腎生検の拡大画像を示しながら病態を考察。さまざまな染色方法で病態を精査している。
（下）回診前のカンファレンス風景。患者さん1人1人に対する服部先生の鋭い質問に、医師と学生が答えていく。

服部先生が教授に就任したのは2005年。以来、無我夢中でひたすら前を向き、実績を積み上げてきた。腎臓小児科という独立性・専門性という“縦糸”を担保しながら、学内の関連診療科との強力な連携という“横糸”を最大限に生かして、患者を中心としたシームレスな対応による最良の診療のための努力を怠らないのが、服部先生の信条である。全国にもネットワークを張り巡らす。

「患者さんがどこに住んでいようと、最善最良の診療を受けられるべき。ここ10年ほどのうちの科の研修医をみてもらえば分かりますが、東北や関西、沖縄など、まさに全国各地から来てくれています。彼らが地元に帰ってくれることで、確かな芽が根付き、小児腎臓病の専門医が各地に育っていってくれる。必要なときには私たちが力を貸し、その後は自宅近くで見守る。徐々にそうした診療網が広がっています」

冒頭の“無事”とともに、腎臓小児科が臨床医として、研究者として大事にし、心がけているのが“5つのP”（peacefully、politely、positively、professional、pioneer）である。これは、服部先生の好きな言葉、仁・義・礼・智・信に通じるという。

「心穏やかに（peacefully）、人に優しくは仁。politelyは義であり、誠実で間違ったことをしない倫理観、そして礼を尽くす姿勢。常に謙虚にふるまい、例えば一緒に働くコメディカルの人にもリスペクトを忘れない。明るく前向きに（positively）というのは信頼し合うところに生まれます。そして、専門医（professional）であるとの自覚をもつことは智に通じます。それに加えて、開拓者（pioneer）スピリッツをもって、難題に挑む。小児腎臓病には、まだまだ病因や病態が解明されていない病気があります。少しずつであっても、それを明らかにし、効果的な治療法を見つけていこうと、みんなで励まし合い、切磋琢磨しているところです」

研究と臨床は表裏一体、リサーチマインドで本質を目指す

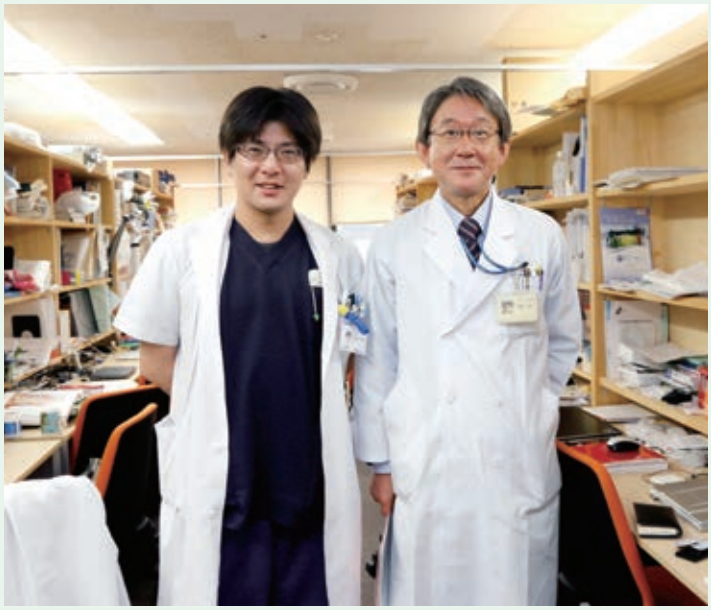
後進の医師たちに口を酸っぱくして言うのが「リサーチマインド」の必要性だ。「大学病院は、診療、教育、研究の3つの要素をバランスよく実践し、継続していかなければなりません。そこにいる1人1人がそれぞれの役割を理解し、まじめに取り組んでいくことでしか、それは実現しない。その核となるのが、リサーチマインドだと思っています」。臨床と研究が遊離してしまわぬように、常にリサーチマインド、探究心を忘れない。最先端の研究への関心をもちつつ、臨床へのフィードバックを考える。同時に、臨床の最前線で目の前にいる患者さんから「これはどういうことなんだ」と研究のヒントを見出す観察力を研ぎ澄まし、本質を追究していく。

腎臓小児科では、国際的に注目される最新の文献を

外来風景。「無事？」と問いかけ、手を握る服部先生。R君が「無事」と答えると、服部先生はR君の肩をもみ、背中を撫でながら、嬉しそうに笑った。

吟味し合う抄読会を週に1回行っている。中堅、若手、研修医、学生……。それぞれの立場と知識の範囲で、今、最もホットな医学的話題を、自分なりに理解し、消化し吸収していく時間だ。先輩医師や、服部先生が随所で要点を解説、注目すべき視点を喚起する。それにより、各自の向き合うべき課題、取り組むべきテーマへの道筋が少しずつ明確になっていく。「例えば、小児の腎臓病の分野で1970年代に見出されたFSGS（巣状分節性糸球体硬化症）という病態があります。各国の研究者がしのぎを削りながら、結局、いまだに解明しきれず、有効な治療法が確立できずにいます。基礎の研究者などとも緊密な関係を築きながら、うちのメンバーも多数の臨床研究を進めています」。日々

病棟の回診風景。子どもたち1人1人に対して、どこまでも丁寧に優しく声を掛けていく。教授室には以前入院していた子にプレゼントされた絵が飾られていて、服部先生の宝物となっている（表紙の背景の写真）。



泌尿器科、腎臓外科、腎臓小児科、腎臓内科、血液浄化療法科の共通の医局で、石塚喜世伸医局長と一緒に。

の努力の積み重ねなくして、成果はない。「私も現役でいられるのは、あと10年。その間に何とかしてくれ、と若い人たちには発破をかけています。ガイドラインに追随するのではなく、自らガイドラインを示し、作成する。その根拠となるような研究を行うことを目指してほしい」

ステロイドにしても、実は、確実な投与量、投与法が確立しているとはいえない。経験則によるところが大きい。「経験則も大切ですが、誰が行っても再現性があるのが科学。科学は医療を強く支える基盤です」

そこには、服部先生の悔いもある。失った子どもたちに対し、せめてできることがあるとしたら、そのときよりは確実性の高い医療を行うことしかない。

「われわれの行う医療という仕事は、うまくいって当たり前と思われますが、実は、何が起こるか分かりません。吊り橋、それも糸のような細いところを進むように、そろりそろりと慎重に判断し、治療法、治療薬の選択をしていっても、まるで、指の間から砂がこぼれるように、命が手をすり抜けていってしまうときがあります。だからこそ、無事に治療薬の投与を終えた、無事に透析を済ますことができた、という“無事”の積み重ねがありがたくて、心にしみるのです」

「小児」と「腎移植」ひとすじに

「僕は、将来、医者になって、アフリカの子どもを救いたいです」。小学6年生の服部少年の卒業文集の一節だ。医学部で臨床実習を始めた服部青年にとっても「小児」はずっと気になるキーワードだった。1980年代の半ば、服部青年が医学部を卒業するころは、今の再生医療と同じくらいのインパクトを放ち、注目を浴びていたのが「臓器移植」だった。「服部君は何をやりたい？」という先輩医師の問いに、服部青年は「子どもの腎移植をやってみたい」と率直に答えた。そこから本人が驚くほどとんとん拍子に事が進み、気が付けば、大阪の大学から、実家のある愛知県を通り過ぎ、東京は新宿の東京女子医科大学腎臓病総合医療センター腎臓小児科に席を得ていた。

「好きな道だけを歩いて、それを続けてこられた。しかも、責任ある立場を与えてもらえた幸福。それに報いなければ」と微笑む服部先生。真摯な決意であっても、力むことなくあくまでも自然体だ。しかし、必要なことには力を惜しまない。

臨床や研究、教育、それらをスムーズに進めるために、環境の整備は服部先生にとって重要な責務となる。後進の育成には、働きやすい体制を整えることが不可欠だ。特に、女性医師にとって出産や育児によるキャリアの中断は大きな悩みであり、周囲がともに解決すべき課題である。東京女子医科大学では、女性医師・研究者支援センターが中心となり、実績が報告され始めている。

日暮れて道遠し。無我夢中でひたすら前へ

「引退したら、30歳の頃から封印していたヨットを解禁するかも」という服部先生。学生時代はヨット三昧。同好会から立ち上げ、クラブに昇格させ、最終的には西日本医科学生総合体育大会（西医体）で4位の

成績を残すまでに。「当然、授業は二の次でしたが(笑)、当時から優秀なのは女子学生。数人のノートを借りて試験を乗り切っていました。いまだに、同窓会があると『誰のおかげで医師になれたと思っているの』とすごまれます（笑)」。しかし、医師として現場に出るようになってからは、ヨットを封印した。「病棟には子どもたちがいる。趣味に費やす時間はありませんから」

では今、まとまった期間の休暇が取れたとしたら？と水を向けると「国際的にも最先端の施設に留学して、研究に集中、没頭したい」と服部先生。「子どもの腎臓病は分からないことが多い。日暮れて道遠し、というのが正直なところです」と語る。服部先生にとって、患者さんのために自らの手で確かな成果を得たいというのは、臨床医として、科学者として、飢えや渇きにも似た根源的な欲求なのかもしれない。

大学時代はヨットクラブを立ち上げた。後方は服部先生の部屋に掛けられたヨット競技中の写真。

病棟のプレイルームで腎臓小児科のスタッフと。優しい笑顔で、子どもたちの現在と将来を支え続けている。

日本におけるベストドクターズ・サービスはBest Doctors, Inc.ならびに同社の日本総代理店である株式会社法研により運営されています。

● ベストドクターズ社について

ベストドクターズ社（本社：米国マサチューセッツ州ボストン）はハーバード大学医学部の教授2名により、「病に苦しむ方々が最良の医療を享受できるように」との理念の下、1989年に創業しました。弊社は現在、本社のある北米をはじめ、中南米、ヨーロッパ、オセアニア各国で事業を展開。日本には2002年に進出し、重篤な疾患で苦しむ方々への「ベストな医師＝Best Doctors in Japan 」のご照会を柱に活動しています。

● 株式会社法研について

法研は1946年に設立され、社会保障の情報発信事業を起点にその領域を拡大し、健康・医療・社会保障をはじめ、年金・介護・福祉など幅広い分野で良質な情報・サービスを提供してまいりました。永年にわたり培われた信頼と実績をもとに、みなさまの「健康寿命」の延伸と「クオリティ・オブ・ライフ（生活の質）」の向上を積極的に支援しています。

ベストドクターズ記念楯

ご選出記念楯へのお問い合わせを多々たまわり、誠にありがとうございます。予想を超えるご反響をいただき個別のご案内が難しい状況のため、本誌にて概要をご案内させていただく運びとなりました。

お問い合わせ、ご購入につきましては、お手数ですが、下記メールアドレス宛にご連絡ください。折り返しご案内をお送り申し上げます。なお、記念楯は過去の年度（2010-2011、2008-2009、2006-2007）のものも別途お承り可能です。

【仕様】木目調枠 縦約33cm×横約28cm 重さ約1kg 【価格】2万4,000円※（送料・税込）
【納期】お申し込み後8週間程度
氏名欄に記載する肩書き、学位は「Dr.」「M.D.」「M.D., PhD.」等からご選択いただけます。

e-mail：bd-tate@bestdoctors.jp（bestdoctorsには末尾に「s」がつきます）

※ 材料費の高騰、平成26年4月1日から実施の消費税増税に伴い、価格改定となりました。

Best Doctors

Best Doctors, Inc.（ベストドクターズ米国本社）
100 Federal Street, 21st Floor, Boston, MA 02110 USA
Tel: +1(617)226-3666

ベストドクターズ社（Best Doctors, Inc）は、1989 年にハーバード大学所属の 2 名の臨床医によって設立されました。今日では、世界 30 カ国、3000 万人以上の方々に、おもに生命保険会社、損害保険会社、企業等を通じてご加入いただいております。

Best Doctors、star-in-cross ロゴ、ベストドクターズ、Best Doctors in Japan は米国およびその他の国における Best Doctors, Inc. の商標です。

本誌は著作権法上の保護を受けています。本誌の一部あるいは全部について、株式会社法研および Best Doctors, Inc. から文書による許諾を得ずに、いかなる方法においても無断で 複写、複製、転載することは禁じられています。

ベストドクターズ社日本総代理店 株式会社 法研
〒104-8104 東京都中央区銀座 1-10-1 Tel.03(3562)8404